



# The Red Stars

●編集・発行:蜂起社/東京都江東区大島1-36-6久島M303●200円(隔月刊)年間購読料:1部2千円(送料込)

## 侵略に抗戦する ウクライナに連帯を!

### <今号の内容>

- ロシアの侵略と戦う UKRAINE (P2)
- ロシアの侵略擁護かウクライナの抗戦支持か (P3)
- プーチンのマヌーバー追認するネオスターリニスト (P4)
- 大ロシア主義増長させた米欧日の欺瞞 (P5)
- 抵抗権を否定する武器支援反対 (P6)
- 不屈に抗戦するウクライナに連帯を (P7)
- 自由と尊厳のために戦うウクライナ (P8)

# ロシアの侵略と戦う

# UKRAINE

原 隆

世界は今、まったく新しい時代に突入している。ロシアによるウクライナへの全面的な侵略戦争は、世界に衝撃を与え、国際情勢を一変させた。「ポスト冷戦」に終わりを告げ、時代を画する転換点となった。この1年で「侵略対抵抗」の戦争が前面化する局面を迎えた。

「プーチンの戦争」とも呼ばれるロシアによるウクライナ侵略は、大規模な侵略戦争が過去のものにはなっていない現実を、改めて我々に可視化させた。いま1人のファシスト並の（あるいは半ばファシストの）独裁者によるあからさまな侵略戦争を、非難できず残忍な戦争犯罪を不問に付して放置すれば、「自由と尊厳」は踏みじられ、世界は間違いなく「弱肉強食」の野蛮なジャングルの時代に逆行してしまうであろう。私たち1人ひとりのこの戦争に対する向き合い方が問われているのである。

ところが左翼は日本に於ても国際的にも事実上、反米（反西側）であるロシアの侵略を擁護する者（侵略擁護派）と、自由と尊厳—民族自決のために侵略に抗戦するウクライナを支持する者（ウクライナ支持・連帯派）とに大分岐している。ロシアの反戦派が、強権的な抑圧体制下にあってもウクライナへ

の支持・連帯を明確に表明している事実をなぜ理解できないのだろうか。本物が偽物か。「反戦」自体の中身が問われているのだ。ウクライナでの戦争を、いかに捉え、どう向き合ったか—。それは必ずや歴史の審判にさらされ、10年—20年後、記憶として刻まれることになる。「忘却に対する記憶の闘い」は既に始まっているのである。

ウクライナはこの1年間、ロシアの侵略者を迎え撃ち、多くの犠牲を払いながら「自由と尊厳」をかけて、同胞のため自衛のために徹底抗戦してきた。焦土と化した街で、市民までもが武器を手に取り、あるいは兵站を支えるボランティアとして命がけで抵抗し続けている。また、かつてロシア・旧ソ連の支配に苦しめられたポーランドやバルト3国、ジョージア、チェチェンから約3千人ともいわれる国際的義勇兵やロシア人部隊「自由ロシア」の約500人がウクライナの抵抗戦争に加わっている。

「自由と尊厳」以外に我々に失うものはない。侵略者に対しては徹底抗戦するだけだ。我々はロシアの奴隷にはならない。「幾人もの抵抗と犠牲によって、私はまだ生きている」—これは侵略と戦うウクライナ人の悲痛な叫びだ。胸に

突き刺さる。彼ら彼女らの痛みに想像力を働かせたい。こうした壮絶な戦いを続けているウクライナの人々に私たちは何よりもまず、「敬意と連帯」の意志を表わすべきだ。ウクライナの徹底抗戦について、私たちが理解する必要がある課題とは何か。ウクライナに連帯するために、私たちは何をすべきか—が問われている。

ロシアによる侵略によって、どれだけ多くのウクライナ人の命が日々奪われているか。国際社会そして私たちは何故、残忍な戦争犯罪を重ねるロシアの蛮行を止められないのか。いま求められていることは、この侵略戦争を一刻も早く止めさせることである。そのためには侵略者であるロシア軍を撤退させること、敗北させる以外にはない。ではロシア軍を撤退させるために必要なことは何か。私は次の3点が不可欠であると考え。それは—第1にウクライナの人々が抵抗し続けること、不屈の徹底抗戦である。第2に侵略者側のロシア国内での反戦機運の拡大。第3には国際的なウクライナへの支援・連帯、トランス・ナショナルな（国境を越えた）デモクラシーの力強さ—このトライアングルが決定的な要素になる。

## ロシアの侵略擁護が ウクライナの抗戦支持か

ウクライナでの戦争は、大ロシア主義を奉じるプーチンによる紛れもない帝国主義的で植民地的なウクライナの併合を意図した侵略戦争である。最悪の残忍な戦争犯罪である。このことを認められず断罪もしない者は、事実上の侵略擁護者である。また「どっちもどっち」であると、ロシアの侵略に反対せず、ウクライナの民族自決権と侵略に対する抵抗権を否認し、同列に並べて「中立」を装うエセ「反戦」派や「平和主義者」は、偽善者である。ロシア軍による「ブチャの虐殺」等で浮き彫りになった残忍な戦争犯罪を目の当たりにしても、ウクライナの人々の痛みに思いをはせることなく、「ロシアだけを非難すべきでない」と平気で言える輩に対しては、あなたは「ロシアの代理人」かと問いたい。

ウクライナでの戦争の原因を「西側およびNATOが仕掛けた代理戦争、帝国主義間戦争」と捉える見方は、単に間違っているだけではない。「冷戦」時代の「米ソ・東西対立」のシエーマにアナロジーさせることによって、「西側対ロシア」の構図に見せかけ、侵略を正当化しようとするプーチンのマヌーバー（事実を偽り人を欺く手法）やプロパガンダに操られ同調した侵略擁護の主張に他ならない。ネオスターリニストに顕著な見方であり、「反米」という点では極右ファシストとの親和性が強い。「冷戦」終焉後の世界情勢について、いか

に歪んだ認識を持っているかをさらけ出している。バイアスに囚われず、デマやマヌーバーに惑わされない眼力を磨く必要がある。

遠藤乾（東京大教授）の「問われる日本の平和主義」（週刊金曜日 2.24号）という論考が極めて示唆に富んでいる。以下引用する。

「まず基本的な事実として、この戦争は、正当化不能なロシアの侵略戦争である。」「大規模・無差別の暴力を正当化するいかなる非もウクライナ側に見いだせない。」「武力抵抗をやめれば、平和が保障されるというのは、現在のロシアを相手にする限り、幻想だということである。」「それでもなお、アメリカや北大西洋条約機構（NATO）がロシアを追い込んだのが悪いという人もいる。」「NATOの東方拡大がロシアを追い詰めた」と主張する人は、逆説的に、軍事偏重大国主義に染まっている。……（旧東欧の）弱小国の視点が欠落している。……ロシアとNATOだけに注目するのは、歴史的にフェアではない。」「イラク等でアメリカも同様の蛮行に及んだではないか」という人は、端的に正しい。同じように批判すればよい。しかし、アメリカのかつての悪行は、ロシアを免罪しない。」「この戦争の終わりはまだ見えない。なぜか。……アメリカが代理戦争を通じてロシアを弱体化させたいから続いているのだろうか。私にはそう見えない。戦争が続いているのは、ロシアが侵略をやめないからだ。」「即時停戦を主

張する人は、まずウクライナが侵略され虐殺されないよう、安全を保証する術を提示すべきである。」「ウクライナはアメリカに巻き込まれて戦っているのではない。2014年以降、少しずつ国土を削り取ってきた侵略国と自発的に戦っているのだ。」「

以上はウクライナでの戦争について共感できる点を抜粋した。

ウクライナへの連帯のメッセージを込めたバンクシーの壁画は、ウクライナの戦禍に世界中の目を向けさせた。バンクシーが、かつてパレスチナのガザ地区で描いた壁画とともに走り書きしたブラジルの教育者パウロ・フレイレの言葉——「強い者とそうでない者との紛争を傍観するなら、それは強い者の側に立つことを意味する。それは中立ではない」——も改めて紹介された。中立を装った「どっちもどっち」論者は、爪のアカを煎じて飲んではいかがか。

ウクライナとの連帯を妨げているいくつかの間違った見方について批判を明瞭にしていくことが必要だ。とりわけ左翼の一部やネオスターリニストがロシアの侵略戦争を、ロシア対米欧（西側）の「代理戦争」「帝国主義間戦争」と捉え事実を著しく歪めている。彼らは「ロシアの歴史的領土が『反ロシア』になることは許されない」とプーチン自身が明言した事実を何故か意図的に無視している。プーチンは軍事的に敗北しない限り、ウクライナを侵略し併合あるいは属国化するという大ロシア主義の野望を捨てることはないのだ。

## プーチンのマヌーバー 追認するネオスターリニスト

ソ連の崩壊を「地政学的大惨事」と捉え「大ロシア復活」の野望—大ロシア主義に取りつかれた独裁者プーチンのもう一つの特徴は、民主主義を求める民衆が自発的に立ち上がり、「蜂起（反抗）する民主主義」のうねりが国境を越えて波及すること、トランス・ナショナルな（国境を越えた）民主主義に対して、極度に恐れ、憎悪を抱いていることである。それは彼の歪んだナショナリズム（国家主義）と表裏一体である。半ばファシズムと言えるものだ。プーチンにとって、東欧やソ連のエセ社会主義体制を崩壊させた民衆蜂起や民主化のうねりは、すべて米国 CIA を黒幕とした陰謀であると捉える。プーチンは、自由と尊厳、民主主義を求める民族自決権という概念自体を認めない。

とりわけプーチンは、2013—14年のウクライナの「マイダン革命」を「西側の支援によるクーデター」として非難。「この陰謀論的ともいえる解釈は、ロシアがマイダン革命の直後、報復としてクリミアとウクライナ東部に介入したことを正当化するのに使われている」（アレクサンドラ・グージョン、『ウクライナ現代史』河出新書）。マイダン革命は、ウクライナの民主化闘争にとって大きな転換点だった。欧州（EU）寄りから親ロシアへ政策変更しようとした汚職・腐敗まみれのヤヌコビッチ政権に

対して10万人の抗議する民衆が首都キーウの広場を数カ月わたって占拠。流血の弾圧によって多くの犠牲者を出しながら自由と尊厳、民主主義を求めた草の根からの民衆蜂起だった。大統領のヤヌコビッチは強権的な鎮圧を試みるも失敗、逃亡した。親ロシア政権が倒れたことに衝撃を受けたロシアは、その「報復」としてクリミアを一方向的に併合、東部ドンバス地方を占領する軍事介入に至った。プーチンは、ウクライナでの民衆蜂起を「ネオナチのクーデター」であると貶めることに腐心し、ロシア国内の反体制運動が連動して自己の独裁体制を脅かす事態になることを恐れたのである。「NATOの脅威」なるものは、侵略を正当化するための嘘で固められた口実にすぎない。プーチンが恐れているのは、NATOではなく自由と尊厳、民主主義を求める民衆自身の蜂起、反抗なのである。

自らの独裁体制を維持し求心力を高めるために「勢力圏」と見なすウクライナを侵略し力づくで併合することは、時代錯誤の帝国主義、植民地主義そのものである。「大国が隣の国の領土を力づくでもぎとる。もはや茶番を通り越して、国際秩序の破壊行為というべき蛮行だ。〈略〉ウクライナを破壊し、住民の命を奪い、隷属国家に作り替えようとしている。……ロシアの偉大さを説きながら、逆に国際信用を損ね、隣国をさらに西側に追いやる。自国に負の歴史を刻印したプーチン氏の責任は重い。なりふり構わぬ強硬姿勢は弱みと焦りの

裏返しでもある」（10.2 朝日社説）。

日本経済新聞（10.1）もプーチンとスターリンの共通性をこう指摘した。「1938年、ナチス・ドイツがチェコスロバキアのズデーデン地方を併合した際、『弾圧されたドイツ系住民の保護』を大義名分に掲げた。英仏は戦争を回避するため、ナチスの横暴を認めたが、増長したドイツは翌年ポーランドに侵攻し、世界を戦火に巻き込んだ。一方、ソ連の指導者スターリンはナチスと一時的に手を組み、東欧分割に動く。1940年、『現地の自発的な意思』があったとしてバルト3国を強制併合した。領土の拡大を『勝利』と喧伝し、求心力を高める手口は当時と似る。」

ウクライナをロシアの一部の「小ロシア」とみなし、再び国内植民地として併合しようとするプーチンの「大ロシア主義」に対して左翼の一部、事実上の侵略擁護派は、まったく批判しない。「ブチャの虐殺」によって浮き彫りになった戦争犯罪も見て見ぬ振りで傍観している。ロシアによるクリミアとドンバス地方等の併合・植民地化を不問に付し容認するに等しい「停戦」を支持さえする。彼らはウクライナが米欧に従属するよりロシアに併合され隷属した方がましだと考えているのだろうか。民族抑圧や併合に反対する民族自決の闘いは、その指導者の政治的性質に関係なく支持するに値する—と考えたのはレーニンだ。つまり侵略や併合に反対する際、政治的条件をつけるようなことはすべきではないのだ。

## 大ロシア主義増長させた 米欧日の欺瞞

ロシアによるウクライナへの全面侵略を許した最大の教訓は何か。どうしてこんな事態を招き阻むことができなかったのか。その原因は、2014年にロシアがクリミアを一方的に併合、東部ドンバス地方を占領下に置いて以降も、米欧日の西側諸国が、ロシアに対して誤った融和姿勢を取り続けた欺瞞にある。その結果、ウクライナを侵略—併合しようとするプーチンの大ロシア主義を増長させたということである。ウクライナは、2014年以降ロシアの侵略によって存亡の脅威にさらされていると国際社会に危機を訴えてきた。プーチンの戦争を止めることができなかったのは、侵略を擁護する者、侵略に見て見ぬ振りをし、中立を装う偽善者がいたからだ。侵略戦争を止めさせる最善の道は、抗戦するウクライナへの支援・連帯を強め、侵略者であるロシア軍を撤退させることだ。

ロシアがウクライナに軍事侵略を始めたのは、昨年2月24日ではない。その8年前にクリミアを一方的に併合し東部ドンバス地方を占領した2014年から既に始まっていたのだ。ウクライナでは大多数の人々がそう認識している。ところがG7の米欧日各国は、14年以降も経済的メリットの大きいロシアとのビジネスを優先。ロシアの侵略にさらされたウクライナの窮状を無視しプーチンの蛮行を

事実上黙認してきた。特にドイツは、ロシアからの天然ガスの輸入依存度を14年以降むしろ高めた。フランス大統領マクロンはプーチンをベルサイユ宮殿で歓待。日本の安倍もプーチンとの蜜月に腐心した。そして米国の前大統領トランプは、ウクライナ全面侵攻を決断したプーチンを「天才的」だと賞賛する有様だった。欧米諸国は14年以降の禁輸措置を無視してロシアの軍事産業に部品を提供し続けてきた「不都合な事実」を隠している。欧米の西側諸国は、ウクライナを支援することによって、その代償を払わねばならないのである。

昨年6月、NATOは2010年以来12年ぶりに戦略概念を改定した。それまではロシアに関して「真の戦略的パートナーシップを目指す」と記していたのだ。クリミア併合に際してもロシアの天然ガスに依存するドイツ等の反対によって改定しなかった。「西側はロシアに逆らえない」とプーチンに思わせ大ロシア主義を増長させた責任は、こうしたNATO諸国の姿勢にある。昨年のウクライナへの全面侵攻を受け、やっとロシアを「同盟国の安全保障と欧州大西洋地域における平和と安定への最大かつ直接の脅威」であると位置付け直した。西側諸国は、危機を訴えるウクライナの声に耳を貸さず、警鐘を鳴らすことができなかった不明と欺瞞を恥じるべきなのである。「NATO拡大の脅威」なる作り話は、西側に責任転嫁して侵略を正当化しようとしたプーチンのマヌーバーにすぎないことは明白であろう。

帝政ロシアと旧ソ連によって、大ロシアの一部である小ロシアと呼ばれ併合あるいは属国（従属国）化され植民地的隷属・民族的抑圧を受けた—という歴史を持つウクライナには、民族自決権とともに国際法上も認められた権利として、侵略に対する、暴力か非暴力かを問わず「抵抗権」がある。そのため武器を必要とするなら、支援することは国際的な義務と言える。侵略に抵抗するための武器を求めることは権利である。それを認めないのは抵抗権の否定である。侵略者を擁護するに等しい。

ところが「武器供与」にナイーブな余り、ウクライナへの支援にネガティブな人々もいる。でも考えてみてもらいたい。1日でも武器供与が遅れば、それだけウクライナではロシア軍の攻撃によって罪のない人々の命が奪われ犠牲者が増えることになる。米欧諸国がロシアに付度して支援をためらっている間、どれだけ多くの人が侵略者によって殺されているか。その現実から目を逸すべきではない。ウクライナへの武器供与が早ければ早いほど、それだけ犠牲者を少なくすることができる。侵略者ロシア軍を敗退させ、戦争を止めさせることができるのだ。ところが米や独・仏等は依然としてロシアを敗北に追い込むことに曖昧な態度を取っている。ウクライナが切望する武器の供与を見合わせているのは、その最新の例と言える。米は兵器・弾薬に余裕があるにもかかわらず「余剰分がない」との情報を故意に流している。

## 抵抗権を否定する 武器支援反対

10倍の軍事力のロシアに対する抵抗戦争で米欧からの武器供与以上に決定的な役割を果たしたのは、ウクライナ人の士気の高さ、歴史的に培われたロシアに対する抵抗心の強さであった。それがプーチンの野望を挫いた根因だ。プーチンが侮り、米欧諸国も見誤った点だ。ウクライナ側に今も士気が衰える兆しはまったく見えない。

ウクライナの世論調査会社「レイティング」が2月21日に発表した調査によると、「勝利を確信している」との回答は95%に上った。また別の調査研究機関「キーウ国際社会学研究所」が2月23日に公表した調査では、ロシアが一方向的に併合を宣言した東部と南部について、8割以上がロシアに譲歩して領土を割譲することに反対した。

ロシアの侵略に抵抗するウクライナを支援することは、民族自決権と侵略への抵抗権を支持する者の義務である。ベトナム戦争が米ソの代理戦争ではなかったと同様に、ロシアの侵略に抵抗しているウクライナは、米欧の代理戦争を戦っているのではない。「反戦」の偽の旗をかざして、ウクライナへの武器支援に反対することは、侵略に対する抵抗権の否認であり侵略との戦いを妨げることに等しい。帝国主義的な侵略に抗して戦う人民への支援は、どの国が支援しているかに左右されるべきではない。ソ連が1968年にチェコスロバキ

アに軍事侵攻し「ブラハの春」と呼ばれた民主化を圧殺したからといって、ベトナムへのソ連の支援に反対すべきではないだろう。第2次大戦でナチス・ドイツの侵略を受けたソ連は米国から何千という戦車、航空機等の武器を供与された。日本帝国主義によって侵略された中国の蒋介石政権は腐敗していたが、世界の支援を集めた。ロシアが現在行っている侵略戦争に対するウクライナの抵抗は、かつて日本の侵略に対して凄まじい抵抗を示した朝鮮・中国・アジア民衆の戦いと同じではないのか。指導者の政治性に関係なく侵略された側の抵抗権、民族自決権は支持されるべきである。それを否定することは、侵略擁護に他ならないのである。

侵略国であった帝国・資本主義国も、自由と尊厳や民族自決、民主主義を求める国に対しては自らの権益の必要性や政治的思惑に迫られて、武器を提供せざるを得ない。そうした武器は、たとえ帝国主義国から供与されたものであったとしても、自由と尊厳のために正しく行使されれば、他国からの侵略に抵抗するばかりではなく、帝国主義的植民地主義的な支配の基盤を掘り崩し、新たな民主主義—トランス・ナショナルな(国境越えた)デモクラシーを創り出すための武器に反転させることができる。

A・ネグリとM・ハートは『アセンブリ 新たな民主主義の編成』(岩波書店、2022年2月刊)で、「武器」の問題に関して次のように考察している。

「私たちは武器の使用を放棄

することを唱道するつもりはない」「私たちは自分自身を守り、加害者を武装解除する必要がある。しかし同時に私たちの武器は、自律性を構築し、新たな生の諸形態を發明し、新たな社会的諸関係を創造するために、私たち自身の内部に向けて有用な働きをするものでもなければならぬのだ。」「極端な状況の中にあっても、人は新しい民主的諸形態の發明を成し遂げることができる。……先に述べたように、武器を放棄することではなくて、むしろ新しい仕方でも武器の問題を提起することなのである。」

侵略戦争を終わらせるには戦争を始めた侵略国側がやめるか、やめざるを得ない状況に、つまり敗北に追い込まなければならない。侵略された側には、侵略を阻み侵略者を撃退するために戦う国際法上認められた「抵抗する権利」がある。ロシアは侵略した国であり、ウクライナは侵略された国だ。それを区別せず同列に並べるような人たち(「どっちもどっち」論者)が、過去の日本の侵略や植民地支配にきちんと向き合えるのか。「歴史修正主義」に堕しかねないと強く危惧する。武器支援が戦争を長引かせるのではない。それはプーチンのマヌーバーだ。「ウクライナが武器を捨てれば、ウクライナは存在しなくなる。ロシアが武器を捨てれば、戦争は終わる」(抵抗する権利—ウクライナ・フェミニストのマニフェスト、22年7.7)。

## 不屈に抗戦する ウクライナに連帯を

ウクライナの人々は、今回の「プーチンの戦争」に対する抵抗にとどまらず、ロシアによる侵略・併合・支配に対して何百年にもわたって自由と尊厳—民族自決のために戦い続けてきた。ところが自由と尊厳には戦う価値がないと言わんばかりに侵略された当事者であるウクライナの頭越しに降伏や停戦を押しつけて恥じない知識人や自称「平和主義者」がいる。ウクライナが抵抗せず降伏すればプーチンは残忍な戦争犯罪をやめると思っているのか。まったく浅薄だ。自分は安全圏にいながら、「反戦」や「平和」を隠れみのにして、侵略に対するウクライナの抵抗の戦いを貶めようとする理不尽で卑劣な言動を私たちは黙って見過ごしているのか。

ウクライナの人々の徹底抗戦とその国際的な支援・連帯なしに、どうやって侵略戦争を止められると言うのか。現在ウクライナを侵略し罪のない大勢の市民を殺戮しているのは、ロシアである（NATOではない！）という事実から目を逸させようとするデマやマヌーバーを許してはならない。キーウ近郊の「ブチャの虐殺」の惨状を目の当たりにして、どれだけウクライナの人々が怒りに震え胸を痛めたことか。あなたはエンパシーを感じないか。日々自由と尊厳が踏みこじられ、たくさんの命が奪われているウクライナの人々の痛みを私

たちは鈍感であってはならない。

ところが今、ドイツやオーストリア、イギリス等では、ウクライナ支援は「戦争を激化させ、双方の無数の兵士や民間人の死に加担している」と極右ファシストが、ウクライナ支援反対、ロシアへの経済制裁反対を掲げ「反戦」デモを組織している。何という欺瞞、偽善であろうか。プーチンが欧州各国の極右政党に資金提供してきたことは周知の事実だ。ドイツではその極右政党「ドイツのための選択肢」とともにネオスターリニストの左翼党がウクライナへの武器供与に反対した。彼らは「プーチンとロシア（の侵略）を直接擁護するか、それらのために言い訳するかのどちらかだ。……プーチンを支持することで極右と言葉を共にしている」（ロアン・ケアリー、米国）。ファシショ的な抑圧下にあるロシア社会で「ロシアは侵略者だ」「私たちはウクライナの人たちと共にある」と危険を冒しても声を挙げているロシア人がいることを知るべきだ。

オクサナ・ミトロファノバさん（ウクライナ国立科学アカデミー研究員）は、「ウクライナの人々が求めるのは『正義ある勝利』だ。戦闘がなくなっても、ロシアに占領された土地が残り、戦争犯罪が裁かれぬ状態は『平和』とは言えない。新年を迎えて、ウクライナ国外の友人たちは『平和を望む』とメッセージをくれたが、ウクライナ人同士では『勝利を』と呼びかけ合っている」（3.3 読売）と明言している。

朝日の国末憲人・編集委員は、

「平和だけではなく正義を」と題する論説（2.26）でこう指摘している。『『平和』は誰もが希求する。まして戦乱の地であれば、その思いはひとときわ強いに違いない。しかし昨年11月にウクライナで実施された世論調査を見ると、ロシア軍による占領が続く状態での停戦を求めた人は、わずか1%だった。停戦の条件として、93%が『クリミア半島を含むウクライナ全土からのロシア軍撤退』を挙げた。多くの人々は、即座に平和を得るよりも、戦う道を選ぶ。つまり『平和』とは異なる価値を重視しているのである。『ウクライナの人々が求めているのは<正義>である』。国際刑事裁判所（ICC、オランダ・ハーグ）のカリム・カーン主任検察官（52）は現状をこう読み解いた。…市民の怒りが、生命を賭しても『正義』を望む意識に結びついている」「今回の戦争では、市民の思いが世界の世論に共有され、欧米では政府に行動を促す力ともなっている」。

ウクライナのフェミニスト活動家は、レイプ犯と犠牲者をはっきり区別すべきこと、そして犠牲者を支援するのが当たり前だと訴えている。また即時停戦を呼びかけた欧州のある「平和主義的声明」に対しては明確に批判を表明し、ウクライナの「武装抵抗の権利」への支持と支援を求めているのだ。

「私たちがこの戦争への関心を失いウクライナへの支援の手を緩めた時、ほほえむのはプーチン氏だ。…私たちの覚悟もプーチン氏の挑戦を受けている」（2.24 毎日）と考えるべきであろう。

## 自由と尊厳のために 戦うウクライナ

いまウクライナでの「侵略対抵抗」の戦争の本質を捉えるには、「自由と尊厳」という普遍的価値とそれを体現する「民族自決権」というレンズを通して見るのが肝要である。プーチンの戦争の目的は、ウクライナの大半ないし全てを占領し、大ロシア主義の帝国—「大ロシア共栄圏」に併合あるいは属国化することだった。ウクライナという存在自体を否定し、地図から消し去ることにあった。だがその愚劣で時代錯誤な野望はウクライナの壮絶な戦いによって挫かれた。

今回のロシアによるウクライナへの全面侵攻によって、欧州も世界もやっと目を覚ました。そしてウクライナの民族自決をかけた徹底抗戦は、「自由と尊厳」という普遍的価値そのものをも目覚めさせた。自由と尊厳を奪おうとするロシアの侵略に対して凄まじい抵抗を示してきたウクライナ民衆の戦いを支持し連帯することは、私たちの最重要かつ喫緊の課題である。なぜなら自由と尊厳のための戦いは、私たち自身にとっての戦いでもあるからだ。

ザハール・ポポビッチは、「武器を持つ権利—抵抗するウクライナから」(22年5.20、『ウクライナ2014~22』国際問題研究会、柘植書房新社)で、「ウクライナ人が今この時に抵抗を止めることは、人間としての尊厳、自由である権利、

モスクワが任命した指導者に従う奴隷であることを拒否する権利、こういったものを放棄することを意味する。」「プーチンの侵略は、ほとんどすべてのウクライナ人に、ロシアの占領者を打ち負かすことでしか尊厳を保てないという思いを抱かせた」と明言する。

ウクライナのソツィアルニィ・ルフ(社会運動)とロシア社会主義運動の共同声明(22年4.7)は、世界のウクライナ連帯ネットワークに支持されている。それは「ウクライナで戦争を行っているのは、プーチンでありNATOではないのだ。……今日、帝国主義的侵略者はロシアであり、NATOではない」とNATOによる代理戦争論を明確に否定している。

最後に「プーチンの戦争を止めよう！ウクライナに連帯を！2.23新宿デモ」(呼びかけ/ウクライナ連帯ネットワーク・SUN)に寄せられた韓国「社会進歩連帯」のソウルからのアピール(抜粋)を紹介する。

「この1年は、ウクライナと世界の民衆には言葉では言い表せない苦痛の1年でした。ロシアがウクライナに対する攻撃を止めれば、この悲劇はすぐにも終わります。したがって、私たちは何よりも、ロシアがウクライナでの占領と軍事行動を直ちに中断して撤収することを要求します。

ロシアの侵攻は、他の主権国家に侵攻し、核の脅威を与え、領土を併合する試みであり、いかなる理由によっても正当化する

ことはできません。もしこれが成功すれば、世界各地で同様の試みが増えることでしょう。特に私たちが暮らす東アジアの未来が闇に閉ざされることとなります。世界がウクライナに対するロシアの『勢力圏』主張を認めてしまえば、台湾に対する中国の『勢力圏』主張もまた、認められることになるでしょう。世界がロシアの核の脅威に屈してしまえば、北朝鮮の核の脅威も強化されるでしょう。したがって、ウクライナ民衆の自決権と尊厳を守ることは、東アジアでの戦争を防ぐための闘争でもあるのです。私たち皆のための闘争です。ウクライナの平和のために、戦争と核兵器のない東アジアのために、韓国と日本の市民も共に闘いましょう。一緒にロシアの侵略を糾弾し、ウクライナの抵抗とロシアの反戦運動を支持し、連帯しましょう。

ソウルより連帯を込めて」

私たちは、侵略者であるロシア軍の即時無条件の撤退を要求する。プーチンの大ロシア主義の野望を挫きロシアの敗北がより早く決定的になればなるほど、それだけウクライナとロシア双方の人命が失われずに戦争を終わらせることができる。プーチンの野望を挫かない限り、「和平」を求めるのは幻想である。ロシアの侵略に徹底抗戦するウクライナを私たちは全面的に支持する。そしてウクライナのソツィアル・ルフ(社会運動)やフェミニスト、アナーキスト等左翼勢力の武装抵抗に断固連帯する。